



「マリア—The Nativity Story」 評・テモテ・コール

クリスマスシーズンに、家族そろって安心して見に行ける映画をご紹介します。

アメリカ、ニューライン・シネマの新作『マリア』(The Nativity Story)が、12月1日から日本各地で上映されます。最近見た聖書物語と言えば、メル・ギブソン監督の『パッション』を思い出す方が多いでしょう。

『パッション』の中の、あるシーンがあまりにもショッキングだったため、家庭でも教会でも、「見に行くべきかどうか」という議論がありました。しかし今回は、そんな心配は不要です。映画の流れはほとんど聖書の範囲内ですから、驚くような場面はありません。

問題と言えば、聖書と違う、または聖書に書かれていないような、クリスマスの伝統に従った内容があることです。

たとえば、聖書には、博士はいったい何人いたのか書いてありませんが、『マリア』では伝統に従って3人になっています。しかもその3人の博士は、(聖書の記述と違って)イエスさまが生まれた馬小屋に、羊

飼いが来た直後に到着しています。

残念ながら映画で欠けている大切な内容は、大空に現れた天使の軍勢の賛美です。監督のキャサリン・ハードウィックがそのシーンをどう描くかに困ったのか、それとも予算を節約するためだったのか、理由は分かりません。

反面、ヨセフ(オスカー・アイザック)もマリア(ケイシャ・キャッスル・ヒューズ)も、とても説得力のある、聖書に近いキャラクターと感じましたし、マリアとエリサベツとの出会いも素晴らしく演じられています。映画のセット(南イタリアのマテラの町とモロッコのワルザザート)も、2000年前のイスラエルの地形と文化をよく反映しています。

家族で見に行く前に、まずはマタイヤルカの福音書から、クリスマススの箇所を

みんなで読むことをお勧めします。そうすれば、映画の中で聖書に忠実なところ、そうでないところなどについて、あとで有意義なディスカッションができます。またそれによって、子どもたちの思いの中に聖書的な事実をより深く刻みつけることができると思います。

現代の「クリスマス」は、ますますサンタクロースやクリスマスツリーやイルミネーションが中心になってきていますが、この映画をきっかけにクリスマスの本当の意味を再確認できるでしょう。

偉大な宇宙の創造者である神さまが、人間の赤ちゃんとなって、みじめな状況の中で貧乏な

若い母親に生まれたこと。ピリピ2章6〜8節の通りに、仕える者の姿をとられたこと。

私たちの罪のために十字架で死ぬために来られたこと。それらの意味を話し合い、一人一人がこのイエスさまを信じる大切さを改めて確認する機会となることでしょう。



「マリア—The Nativity Story」

製作◆2006年 アメリカ(ニューライン・シネマ)
監督◆キャサリン・ハードウィック
上映時間◆100分
日本配給◆エイベックス・エンタテインメント